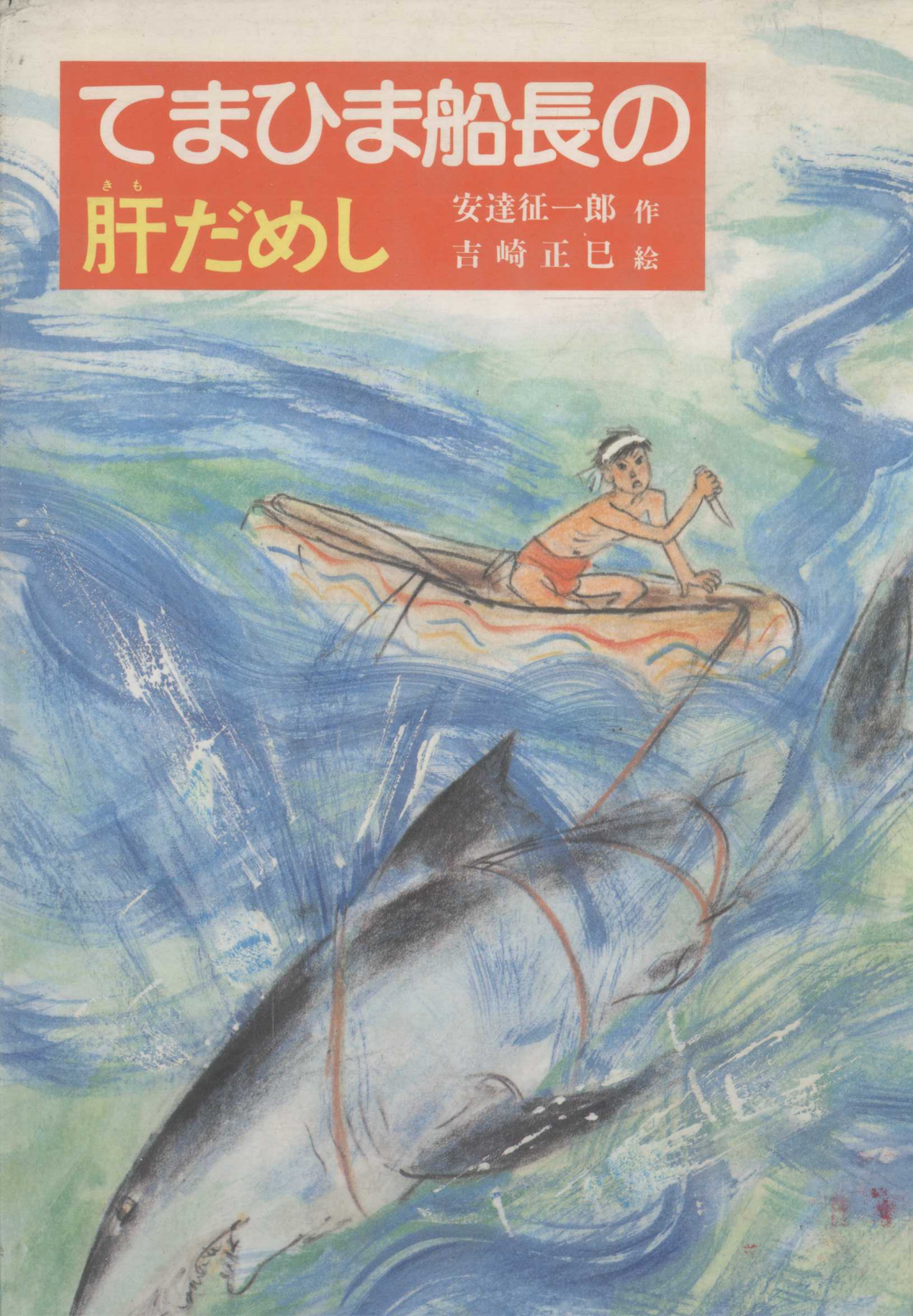


# てまひま船長の

きも  
肝だめし

安達征一郎 作  
吉崎正巳 絵





子どもの文学

---

てまひま <sup>せんちよう</sup>船長の <sup>きも</sup>肝だめし

NDC 913      偕成社 174p 23cm 1984年

発行 1984年1月 初版第1刷

---

|     |                                                                                |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------|
| 作 者 | <sup>あ</sup> 安 <sup>だち</sup> 達 <sup>せい</sup> 征 <sup>いち</sup> 一 <sup>ろう</sup> 郎 |
| 発行者 | 今      村      廣                                                                |

---

発行所 株式会社 偕      成      社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話(03)260-3229(編集部) 3221(営業部)

振替 東京5-1352番

印 刷 新興印刷製本株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-626720-5

Printed in Japan

©Seiichiro ADACHI, Masami YOSHIKAZAKI

1984

# てまひま船長の 肝だめし

安達征一郎 作  
吉崎正巳 絵





やぎ島<sup>じま</sup>は無<sup>む</sup>人<sup>じん</sup>島<sup>とう</sup>だ。

ほ<sup>あな</sup>ら穴<sup>あな</sup>が八<sup>はち</sup>つある。

台<sup>たい</sup>風<sup>ふう</sup>がくると、その八<sup>はち</sup>つの

ほ<sup>あな</sup>ら穴<sup>あな</sup>のうち、七<sup>しち</sup>つのほ<sup>あな</sup>ら

穴<sup>あな</sup>が、水<sup>みづ</sup>びたしになる。

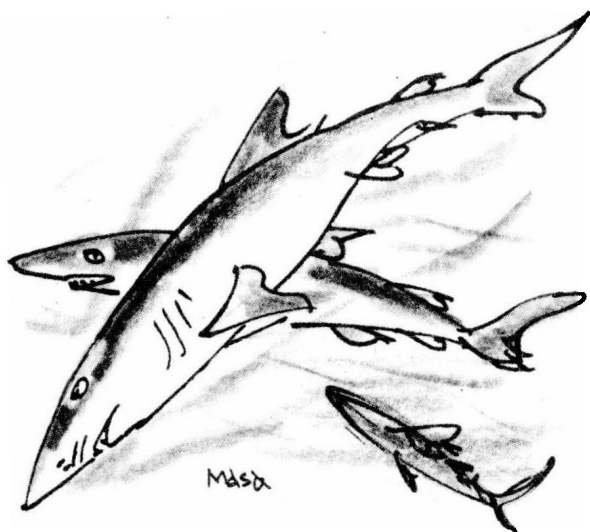
こ<sup>こ</sup>つこ<sup>こ</sup>くとち<sup>ち</sup>かづいてくる

台<sup>たい</sup>風<sup>ふう</sup>のな<sup>な</sup>か<sup>か</sup>で、正<sup>しょう</sup>一<sup>いち</sup>と信<sup>のぶ</sup>行<sup>ゆき</sup>

は、は<sup>は</sup>た<sup>た</sup>して、た<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>一<sup>いち</sup>つ

の安<sup>あん</sup>全<sup>ぜん</sup>なほ<sup>あな</sup>ら穴<sup>あな</sup>を、発<sup>はつ</sup>見<sup>けん</sup>で

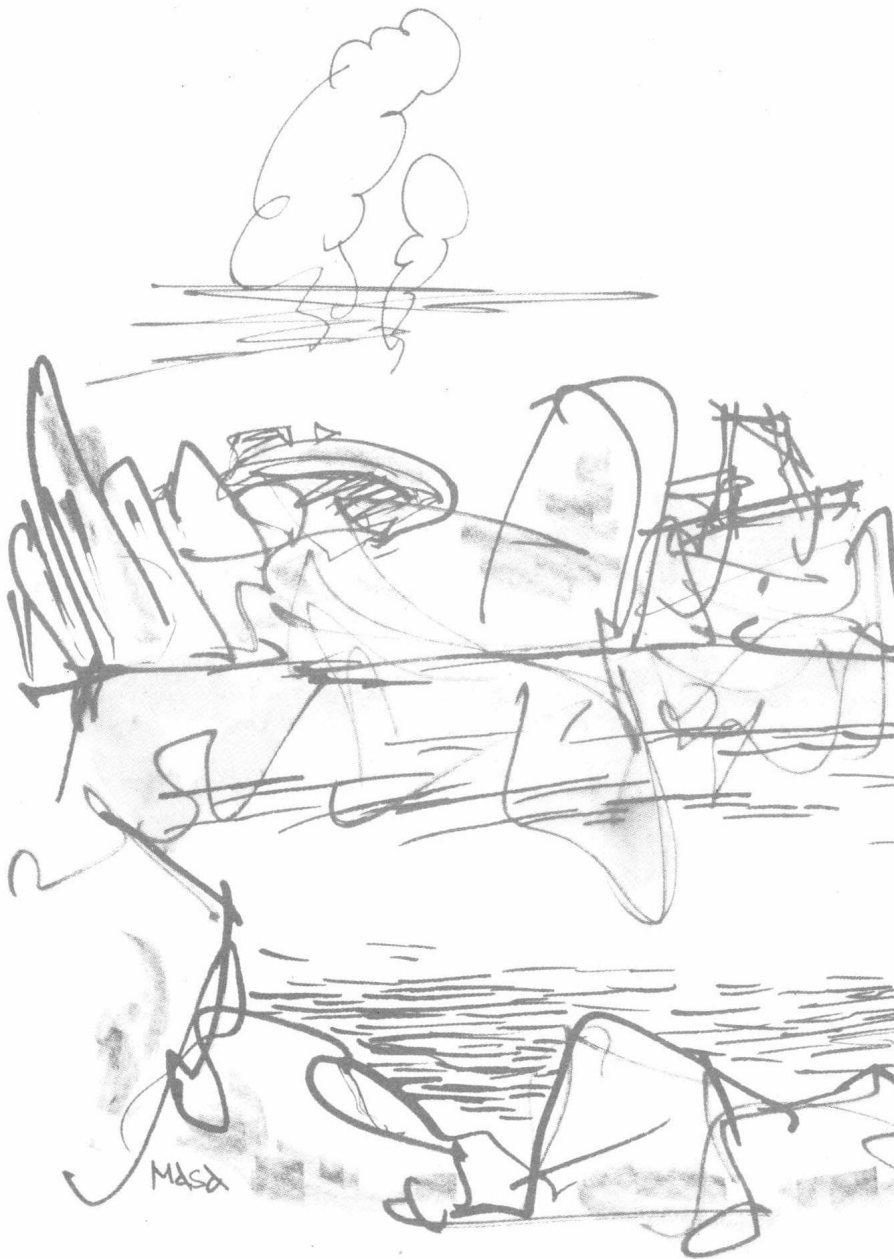
き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>だ<sup>だ</sup>ろ<sup>ろ</sup>う<sup>う</sup>か。



てまひま船長の肝だめし／もくじ

|   |                                                 |     |
|---|-------------------------------------------------|-----|
| 1 | 船 <small>ふね</small> によわい子からきた手紙                 | 8   |
| 2 | スパルタの海                                          | 24  |
| 3 | 元服式 <small>げんぷくしき</small> のおきて                  | 44  |
| 4 | 船長 <small>せんちょう</small> の説得 <small>せつとく</small> | 59  |
| 5 | 人食 <small>ひとく</small> いざめあらわれる                  | 74  |
| 6 | 信行 <small>のぶゆき</small> の決意 <small>けつい</small>   | 96  |
| 7 | 台風 <small>たいふう</small> のやぎ島 <small>じま</small> へ | 115 |
| 8 | あれか、これか？                                        | 130 |
| 9 | 肝 <small>きも</small> だめしの海                       | 154 |
|   | あとがき                                            | 174 |







作者・安達 征一郎（あだち せいいちろう）  
1926年，鹿児島県奄美大島に生まれる。戦後，  
新聞記者をやりながら、『太陽狂想』（群像）  
を発表，注目される。以後作品を発表しつづ  
け、『怨の儀式』『日出づる海日沈む海』が直  
木賞候補になる。島・海・太陽を主題にした  
幻想風の，激しい情念の作品で知られる。児  
童文学に『てまひま船長の宝さがし』がある。  
住所／埼玉県入間郡鶴ヶ島町富士見 3-2-301

画家・吉崎 正巳（よしざき まさみ）  
1914年，山口県に生まれる。1935年独立美術  
展に初入選。現在，第一美術協会常任委員，  
児童出版美術家連盟会員。絵本『こぐまのぼ  
うけん』『ざりがに』『とびうお』，さし絵『子  
犬の名はチロル』『てまひま船長の宝さがし』  
など多数。住所／東京都練馬区練馬 2-31-2

安達征一郎

# てまひま船長の肝だめし



# Ⅰ 船ふねによわい子からきた手紙

「正しょうにいちゃん、こんどは、いつ航海こうかいにでるの？」

と、となりの家のちづるちゃん。

「ああ、ちかくね。」

と、むねをはってこたえたのは、正一しょういち。

「ちかくって、いつ？」

「む、む、む……」

こたえようがなかったので、正一は口ごもってごまかした。

「また、まえの乙姫島おとひめじまのときみたいに、かつやくしてきてね。」

「オーケー。まかしておけてんだ。」



正一は指をパチンと鳴らして、むねをそらした。

古仁屋小学校五年生の森田正一といえ、ちづるちゃんのような、幼稚園にかよっている女の子からさえ、つぎの航海が注目されている、町の有名人だった。

正一が、あまみ大島の子どもたちに、ひろく名まえをしられるようになったのは、この夏休みはじめの、乙姫島いき以来のことである。

夏休みのはじめ、正一は、尊敬するてまひま船長の持ち船へるるる丸<の>につて、あまみ大島の離島の、乙姫島へいった。そこで、ふしぎな靈感の持ち主の島中ゆかりという女の子と、中村広志という男の子と友だちになり、密輸商人一味をやっつけて、海底洞くつから金ののべ棒を発見した。そのときの正一たちのかつやくのもようをしるしたのが『てまひま船長の宝さがし』だ。

そのときの話は、また、あまみ大島の〈南島日日新聞〉に、五日れんさいの記事になって、大きくでた。おかげで、正一はすっかり有名人になってしまった。

それ以来、みんなは、正一の顔を見ると、

「こんどは、どこへいくんだ？」

とか、

「いつたつんだ？」

とか、たずねた。

みんなは、森田正一を、てまひま船長の信頼のあつい弟子とみて、正一ならば、船長の航海予定をぜんぶつかんでいるにちがいないと、買いかぶっているのだった。

そんなとき、こんどは、なん日に、どこそこへいくんだぞ、といえると、正一の男があらがることはわかつているのだけれど、正一にはこたえられなかった。

というのは、るるるる丸は、出港日、ゆきさき地のきまつている定期船とちがって、離島の人たちから〈相談〉をもちかけられるか、〈招待〉をうけるか、あるいは、船長じしんに離島いきの〈要件〉がでないかぎり、出港しない不定期船だったからである。

つまり、いまのところ、るるるる丸には、すぐいかりをまいてはしりださなければならぬほどの、いそぎの相談も、招待も、要件もなかったので、出港予定がたたないというわけだった。

だが、正一のかんによると、るるるる丸の出港の日がせまっているかんじだった。正一

は、船長の番茶をのむ回数かいすうのふえたことで、そのことをした。

船長は、ながく潮風しおかぜをすわらないでいると、のどがかわき、声がかすれてくるのだ。それで、しょっちゅう番茶をのむようになる。こうなると、こののどのかわきは、青い海や、さんご礁や、水平線や、せきらん雲や、無人島や、小さなみどりの島をもとめて、船をはしらせないかぎり、いやされないのだ。

また、うまいぐあいに、船長にこういう症状しょうじょうがおこると、かならずといっていいほど、数日以内に、離島りとういきの用件ようけんがまいこんでくるのだった。

だから、正一は、船長の出港命令しゅつこうめいれいがいつくだってもいいように、この夏休み二回かいめの航海かいにそなえて、待機たいきしているのだった。

けさも、こんなことがあった。

朝ごはんをたべているさいちゅう、とつぜん、おとうさんが、

「おい、正一、あしたトローリングにいくぞ。」

と、正一にむかって大きな声でいった。

正一のおとうさんは、鹿児島や沖縄航路の汽船会社の代理店の所長しやちやうをしている。夏休み

は、本土ほんどから観光客かんこうきやくや帰省客きせいきやくがおおぜいやってくるので、おとうさんの会社かいしゃのかせぎどきである。

じじつ、おとうさんは、七月にはいつてから一日も休みをとっていなかった。それが、めずらしく、あした休みがとれたので、おとうさんじまんのモーターボートしやういちに正一しやういちをのせて、引きづりにでかける、というのである。

おとうさんは、夏休みにはいつてから、いちども正一しやういちにつきあっていたので、正一にわるいとおもって、むりをして休みをとったのにちがいない。

だが、おとうさんと沖おきへでているあいだに、るるる丸まるにでていかれたらこまるので、

「あしたは、だめだよ。」

と、正一しやういちは、わざとふきげんな顔でことわった。

おとうさんは、じぶんのトロリングのさそいに、正一しやういちがとびあがってよろこぶにちがいないとおもっていたらしく、正一しやういちに、べもなくことわられて、げげんな顔をしていた。

正一しやういちは、大いそぎで宿題しゅくだいをすませると、船長せんちやうの家へむかった。

てまひま船長せんちやうの本名は、南波松次郎なんばまつじろう。もと外国航路がいこくかうろの汽船きせんの船長である。停年退職ていねんたいしよくのあ

と、故郷こきやうのあまみ大島おおしまにかえつてきて、離島りとうの人たちの相談相手そうだんあいてになっている。

へてまひま船長せんちやうのあだ名のゆらいは、船長せんちやうの人がらと知識ちしきをかつて、県内けんない県外けんがいのあらゆるところから、就職しゆうしよくの話がもちこまれてくるたびに、

「わしは、つとめる気はないんだよ。年金ねんきんでほそぼそとくらしていけるでな。わしはこれからの余生よせいを、海すき、船すきふね、島すき、子どもすきの四つの道楽どうらくにささげたいのでな。」と、おだやかにことわったあと、

「わしは、てまひまをかけることを、モットーにしておるのでな……。いまのいそがしい時代じだいには、あわん男だよ。」

こうつけたして、高たかわらいした。

つまり、この、なにごとにもてまひまをかけることのすきな、船長せんちやうの生きかたが、あだ名のゆらいだった。

船長せんちやうの家は、海岸かいがん通りにある。家は、こちんまりした平屋ひらやだが、庭にわはひろかった。

花のさく木のすきな船長せんちやうは、庭にわに、熱帯ねつたいや温帯おんたいの花木かぼくをいっぱいうえていた。春はさくら、もも。夏はハイビスカス、ブーゲンビリア。秋はもくせい、ふよう。冬はつばき、う

めが花をつける。

町の人たちは、船長の家のまえをとおるたびに、

「ああ、船長の人からそっくりの、いいかおりだなあ。」

と、顔をほころばせて、四季おりおりの花のかおりを、むねいっぱいすいこんだ。

正一が庭にはいっていくと、えんがわにこしをおろしている、アンダーシャツに短ズボン、ゴムぞうりばきの、下ばらのすこしつきでた船長のすがたが見えた。

船長は、いましがたまでホースで水をまいていたらしく、庭の砂や花だんの花が、びっしりぬれていた。

船長は、目をうるませて、手紙に読みふけていた。手紙がきたので、水まきをやめたといったようすだった。

「船長、どうしたんですか？」

正一は、かなしいしらせでもきたのだろうかとおもって、声をかけた。

「よう、正一か。いま、つらいしらせがとどいたんだよ。」

船長は手紙から目をはなして、なみだのいっぱいたまった目で、正一を見ていった。

